

可認物便郵種三等省信號白六十二月二十日～十三日明

行發(日五十、日一)回二月每、號三十六第

元 戊 五十年九月四十三日明

宗教時報

號三十六第

●神道家諸氏に告ぐ

社論 説

錄

文學士本多辰次郎
高陽生

●社會問題と佛教家

雜論 說

錄

文學士本多辰次郎
高陽生

●先德餘香(其七)

(承前)

文學士本多辰次郎
高陽生

●南信の風物

(承前)

文學士本多辰次郎
高陽生

●恭謙ある人(下)

信眾
讀者

曉鳥敏

●政教時報記者に呈す

社會

鳥海鷹次郎
土倉是空

●米國に於ける新十字軍 ●米國大統領狙撃せらる ●紛々錄 ●教界彙報

大日本佛教徒同盟會總領

- 一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛教護持の責任を全ふし健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し其學徳を高めしめ又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認教制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して善良なる家庭を作らしめ又社交を融和せしむる事。
- 八、積極の方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
- 九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛教の光輝を發揚し其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政 教 時 報

神道家諸氏に告ぐ

一 天下の遊民

余輩徒らに排佛家の口吻を學ぶにあらず、昔者唐の韓愈原道を著して論じて曰く、古の民たる者四、今之民たる者六、古の教ふる者其一に處る、今之教ふる者其三に處る、農の家にして粟を食ふの家六、工の家一にして器を用ふるの家六、賈の家一にして焉れに資るの家六、之れを奈何ぞ民窮して且盜せざらんやといへり、蓋し六とは士農工商の外に老家と佛家とを加へたるなり、論旨固より粗笨にして主我的偏頗の説たるを免れずと雖も、又一分の真理無きにあらず、彼國南北朝隋唐時代には名僧智識輩出して支那佛教の精華を發揮せしめし時代、却て儒家には詩文を弄して悠遊する大家はありしと雖も、經世濟民の術ありし者、論理綱常を道説して風教を維持せし如き者を見ざれば、儒家が佛家を遊民と罵るは、見當違ひの甚しきものありと雖も、而も猶唐代に在りても老家は勿論佛家にも、天下の遊民と指稱せられても一言の申譯もなかりし者多々ありしは疑ふべからず、今日の佛教徒かの原道を見て怒ると雖も真正怒り得る資格ある者は割合に少なかるべきを恐るゝ者なり、佛教僧侶の一半は或は眞に天下の遊民にあらずやと疑はるゝなり、佛教已に其一半を遊民を以て

○政教時報第六十一號目次

○モルモン宗に就て

○蒙古人の喇嘛教に對する

○善光寺より歸りての記(文學士本多高陽)

○吾人の人格上に及ぼす宗教の感化力(文學士真岡湛海)

○佛教大學設置の議(獨歩生)

○淨土宗の大奮發○茶代廢止會等

○佛教徒同盟會讀書者

○本誌廣告

○本誌は毎月二回(一、十五日)發行とす

○本誌は一切前金にあらず御注文に應せず

○本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事

○本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全 國
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料
●廣告料五號活字一行(二十七字詰)	一回	金拾錢		

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事

一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一一番地

發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

印 刷 製 作 人

百目木智達

明治三十四年九月十五日印

占有せらるゝとせば、神道家即ち神職は如何、神職固より悉く祠邪教といふものにして、猥りに人間の弱點に乗じて吉凶禍福を説き、禁厭咒符を以て迷信を鼓吹し、腐水を以て醫藥を防遏し、人心を蠱し、社會を毒し、風俗を破ること幾何なる際を窺ふ時は、實に情けなくも又呆れざるを得ざるなり、其實多數は、天理教、蓮門教、丸山講、金光教、黒住教、御嶽教、富士講、其他何といひ歟といひ、幸ね皆世人が目して淫祠邪教といふものにして、猥りに人間の弱點に乗じて吉凶禍福を説き、禁厭咒符を以て迷信を鼓吹し、腐水を以て醫藥を防遏し、人心を蠱し、社會を毒し、風俗を破ること幾何なるかを知らず、是明に古は國法を以て嚴禁せし所にあらずや、其他に至りては或は俳優侏儒の類あり、漁業農業に從事するあり、賤しき内職に口を利く者あり、其他真正の神官の職を盡すと目ざるも何よ神社祠官とか、祿宜とか、いふ輩に至ても、腹を肥さんと企つる等隨分沙汰の限りなる話は到る處に之を切りに氏子中に課税する如くに、神饌米と稱して米穀を集め、何々講の掛錢と稱して金錢を徵收し、賽錢を私し、祭禮に私想固陋にして、世の進歩に伴はず往々科學の發達を害するわたり、余輩は進んで之を立證せんと欲するものにあらずと雖も、思若し如上の徒ありとせば、之れを目して天下の遊民と稱する者ありとするも、諸氏は恐く辯解に苦まるゝなるべし、

人、教師十萬一千八十五人ありと。之を神職を實際必要とする明治三十一年末の調査に據れば、神道教師の數は管長十二

神社の數に比し、又之を神道教會所の數に比例するに勿論か
る大社及教會所の數詳ならざれば的確に論ずる能はずと雖
も、試みに之を佛教師及寺院に比較するに、寺院數は七萬
一千九百餘にして、外に說教所及出張所等千以上に上る、然
るに僧侶は管長三十九人、教師六萬一千七十八人に過ぎざる
なり、佛教には此外非教師僧侶なるものありて、其數四萬五千
八百八十一人(同上明治三十一年末調査)なり、之を合算する
も、其數神道教師の數を稍超過するのみ、而して多數の信徒
に對して實際の佛教にも行き届かぬながらも從事し居るなり
實際人生に必要な葬祭の大禮をも勤め居るなり(神職も勤
むれども其數極めて僅少なり又葬祭に從事するは僧侶の本意
にあらざれども事實必要的業なり)、これに比較すれば何人も
神道教師の多きに過ぐるといふを否定せざるべし、而して佛
教僧侶は非常に世間より注目せられ、種々の攻撃を蒙り、坊
主といへば馬鹿の異名の如く考へらるゝと雖も、神官は一向
世の攻撃を受けざるなり、然れども幸か不幸か、攻撃に刺激
せられて僧侶が近來慈善的社會事業等の如き有益の事を爲す
者を生ぜしに、神官は愈腐敗し、何の仕出したる事も無く何の
活動をも爲し能はざるなり、其注目せられたるは寧ろ神道教
師諸君に取て名譽にはあらずして、不名譽極はまる次第とい
ふべし、今日其攻撃を受けざればとて枕を高くして眠を貪る
を得ざるなり、

三 有益ある事業を爲せ

即今神道教師諸君高枕安眠し得るも、之に安んじて今趨

ざる所なり、佛教家も諸宗諸派能く争ひ、又合して事を爲さ
んとして失敗すること多しと雖も、耶蘇教家も同じ歴史を有
すと雖も、猶皆活氣あり事を成さんと試み、惟り神道家は、
何等の云爲あるとも見聞せざるなり、諸氏幸に余輩の苦言を
耳に逆ふと怒らずして、社會の爲に貢獻せんとを心掛けられ
よ、是我國粹を億萬年の後に傳んへが爲にも、又諸氏が自家
の勢力を張らんが爲にも最必要不可缺の務たり、其事業の性
質種類は別問題として余輩茲に論せざるべしと雖も、切に希
望して止まざるなり、

四 神道教師の養成

余輩は此に至りて諸氏に教育を振興すべきを勧告せんば
あらざるなり、既に現今の如き有様に安んじてならば、教師
の數の夥多に過ぐることを論せり、然れども諸氏が奮發して
世の公益を爲し、社會に貢獻する所あらんとなれば、啻に今
日の教師の數が多きに失せざるのみならず、韓信の兵を率ゐ
ると同じく多々益善きなり、されど斯くまでに進歩したる一
社會とせんとならば、今之神官諸氏にては餘りに無學不術な
り、固より大學者もあらん、大手腕家もあらんかなれども、
其多くは無教育なり、斯る無教育の徒は何程多數に集りたり、
とて、大事業有益なる大事業は成し得られざるべし、故に神
官の教育の急なることは實に眉毛を燃くが如きのみ、教育を
受けざる今の諸氏が直に公益を起さんと欲して企圖する所あ
りとも、恰も雪を捨て井を埋むるが如けんのみ、然れども今
の神職諸氏を教育せんことは至難の業に屬すれば、要は後繼

勢に放任し置く時は早晚識者の指彈攻撃を受くることは免る
べからざれば、永遠勢力を保持寧ろ進んで皇張すべき所以に
あらざるなり、況んや今の如き諸氏の状況は決して、畏くも我
皇祖皇帝を始め奉り、天神地祇の御恩食に添ふ所以にあら
ざるべきをや、或西洋人は日本人を最迷信に富む種族なりと
論せり、(W. E. Griffis's Religions of Japan)の如き是なり、
又或る歐人は最早條り遠からざる將來に於て神道は滅亡すべ
ければ、研究するは今に在りとて、頻りに神道の研究に從事
すとか聞く、余輩之を聞いて大に怒りしと雖も、今の多くの
神道家諸氏の行動を視るに、如何にも進歩する社會に處する
神道家諸氏の行動を視るに、如何にも進歩する社會に處する
法にあらざるに似たれば、西洋人などにては斯る感想を起す
も、一理ありといふべし之を要するに十萬人以上といへば頗
る大數なり、此大數の諸君が奮勵一番せば、何を欲してか成
らざらん、夫の耶蘇教徒を見よ、彼等は今日猶國體に合せず
との攻撃を受けて頗る不利益の位置に立てり、而して其徒は
新舊諸派教師信徒合して漸く十一萬程にして當に神道教師の
數と匹敵するなり、而して其爲す所最活潑にして見るべきも
のあり、諸氏奮勵せずして可ならんや、
諸氏は又諸氏の先輩を見よ其勇猛精勵なる實に感するに餘
あり、明治維新の大業の一半は諸氏の先輩の成就せし所にあ
らずや、諸氏能く之を熟知し常に誇る所にあらずや、而して
今諸子の狀態は前述の如し概すべからずや、余輩は神職諸氏
の社會は如何なる有様なるや、詳悉知了せざれども、從來諸
氏が一致して事業を爲すが如きは殆ど全く余輩の耳朶に達せ
者を教育するにあらんのみ、然るに教師養成の學校といふも
の、十餘萬の神職を養成せんには至て少くして、殆ど二三學校
に過ぎず、且教師となるには派によりては何の試験も殆ど要
せざる有様にて、又何の學校を卒業すべき者も要せざるなり、
斯る有様にては、神道家自身にも不利なるのみならず、國家
の爲社會の爲其不利益は擧げて枚々べからざるなり、佛、耶兩
教の如きは皆力に應じ、振て學校を設立して後進養成に、力
ひるに、若し神道家にして長く今日の體に放置せば、自然淘
汰の原則はよも免る能はざるべし、余輩は熱心に神道教師養
成の設備を神道者も奮て整備し、政府も其監督を嚴にせんこ
とを希望するなり、

五 政府の監督

信教は自由なりと雖も、無制限の自由にあらざることは今
更事新しくいふの要なし、而して今之神職等が猥りに妖言を
放ちて迷信を鼓吹するとは最彰明較著なる事實にして、疑を
知る所なるが、地方は一層甚しくして、山村僻邑碧瓦高く聳ゆ
るを見れば天理教の會堂ならざるは無きは、近來地方巡回者
の等しく驚異する所なり、而て彼教會の特質として、財産ある
者は之を教會に擲て殆ど其有財產として處分し居るなり、彼
屋敷を拂ひて田賣り給へ(惡しきを拂ひて助け給へといふ
天理教のとなへごとを斯く言ひ爲すなり)

これを社會主義とか言ひて、いかめしく理論的に顯はるれば、當局者の忌諱に觸れて、忽ち鐵錐を頭上より下さるれども、之を神道なりと稱して愚民の間に鼓吹すれば、政府は恬として知らざるものゝ如し、余輩を以て見れば、學殖ある者の間より起れる理論的より入れる社會主義は、大に佳なる點を有すれども、寧ろ愚民間に天理教の如くに行はるゝものこそ大なる弊害あるなれ、こは主として天理教に關する弊害なれど、余が首めに述べし弊害の如きは、大凡は神道各派に通する所なり、これには種々なる原因も存すべれど、餘りに政府が放任にして神道教師には如何なる者もなり得ることは、確に其一因たらずんばあるべからざるなり、俳優も善し、漁獵も善し、如何なる手内職も可なり、正直に看板に舉げて爲す時は業務を妨ぐる如きは言語道斷固より論するを要せし、何れにして國民の品位に關すること無からんか、腐水や咒符を以て醫療も政府當局者が一層の注意を以て、嚴密に取締り、神道をして健全なる發達を遂げしめ、淫祠邪教たる岐路に迷ひて自らを害し、家國民人を毒する如きこと無からしめんこと、余輩の熱心に希望する所なり、

論說

・社會問題と佛教家 沖田懸鼓

廿世紀に於ける世界の最大問題は何にであるかと云ふ事に

き國民全體の思想が發達して居る所ですら、社會主義は掠奪壟斷の富有からは嫌惡せられて居るのであるが、吾人は我が日本の如きも追々社會主義を唱道する事が必要であるが、社會何をしたせいでか社會主義と云へば何れも彼れも頭から毛嫌ひをして居る趨勢がある此れは一般國民の思想が未だ幼稚であると連想せられるよふになつて居つて、虛無黨も無政府黨もあつて、社會主義の妙味を知らないからでもあるが、社會主義と云ふと日本人にはすくに破壊、亂暴、暗殺、爆弾等の本質を知つて居る者が渺くない、だから嫌ふのも尤もである、成程歐米各國では萬國共産主義と云ふようなる過激な社會主義も行はれて居るから、隨分社會の秩序を破壊するようないでのある、

社會主義は現今の如き不完全なる社會組織よりして起る貧富の懸隔をば排除してもそつと平等的で安樂に何人でも衣食住だけはなし得るの社會をば建設せんとするに外ないのである、

夫れであるから、社會主義と云へば頭から蛇蝎してしもよて、之れをば研究をもして見ないと云ふよふな事は吾人の取

付てば、昨年後半期頃は歐米各國の雑誌や新聞では種々豫言的に論じた者が多かつたが、其の内で誰も彼れも異口同音に論じたのは帝國主義と社會問題であると云ふ事を云ふたのが多かつた、實に此の二大問題は十九世紀の後半以後は歐米各國を風靡し振蕩して居るのであつて、將來も増盛んになつて行くのであるふと思ふ、所が、此の二大潮流は遠く太平洋を越へて已に我日本帝國へも進入して愈其の手足をのばさんとしつゝあるのであるが、帝國主義は日清戰爭の餘勢と其後益東洋多事の今日であるから、先づ大に受けのよい方であつて、殆ど今日の所此の主義に付ての異論は渺くないのであるが、次の社會主義も其の萌芽は充分に日本國內に顯はれて居るのであるから、或る一部の基督教徒は社會主義で以て實際に活動するの準備をして其の宣言書までも發表し結社の届までも出したのを、何故だか警視廳では聞き届けなかつたのみならず、其の宣言書を轉載した新聞や雑誌までも發表し結社の届までも發行を禁止せられたる上に告發までせられたのである、此ふ云ふぐはいに社會黨は日本に生れるのは中々難産であるのであるが、全體此の社會主義は世界の一大潮流であるのだから、一時は人爲的でもつて社會黨は防衛する事が出来るにも知れぬが、絕對的にその主義をば日本で以て滅絶する事は到底出来ないであらふと思ふ、

そこで近世唱道せらるゝ社會主義と云ふ者種々あるのであるが、此等の社會主義なる者は單に政治問題ではなく其の重なる部分は經濟問題が占めて居るのであるから、歐米の如き事ではなかるふと思ふ、殊に宗教家の如き人心を司配する可き大責務を有して居る者は、之の將來日本に勃興す可き社會問題をは輕々に觀過してはならんであらふ、斯く云はゞ宗教家諸氏は社會主義の如きは一種の經濟問題であるから、之れは經濟家や政治家の解釋す可き問題であつて、宗教家の關係す可き事柄にあらずと云ふ論者もゐるが、然しかし一步を退いて考へて見れば、吾人が肉體を有して社會に生息して居る以上は、決してこの人間の生活問題をば輕視してはならないのである、或る宗教家は人は精神のみで以て生きて居らぬが、此等の社會主義なる者は否定する事は出來ぬのであるから、宗教家が社會一般の人類則ち一文不知の尼入道にまでも、精神上の安慰をば與へんと思はし、此の肉體上の問題なる生活と云ふ方面からも深く考へて見なければならぬであらふと思ふのである、

彼の孔子聖人の云はれた、恒の產なき者は恒の心なし、衣食足て禮節を知り、窮すれば則ち濫す、と云ふは實に動かす可からざるの格言である、然かし顔回のよふな、又希臘の仙人と云はれたる、ダイオゼネスのよふな貧困の人であつても道を喜ぶような徳の高い者も、たまにはないではないが、彼等は破格な人間であつて、普通の人間は皆此の調子には行く者では決してない、而して顏子の如きも未だ一簞の食と一瓢の飲でもあつたからして道を樂しまれた餘裕が有つたかも

知れぬが、今日の社會組織のよみを弱肉強食の有様をば、此のまゝ放任して何處までも進めて行かしめたらば、夫れこそ一箪の食一瓢の飲所ではなく、一粒の米と一匙の水をも喉へ通す事が出来ぬ人類が多く出来るかも知れぬ、斯ふ云塙合に於ては、普通の人間は道徳とか信仰とか云ふ事が必ずして耳へもなにも入る者ではなかるふ、又諸氏は少しく新聞の三ページを注意して視たまへ、恐る可き犯罪悲惨なる活劇は其の多數が生活問題から来て居ないのはまれであるではないか、之れから考へて見ても貧困が實に偉大なる影響をば精神上に及ぼすは理に於て明らかであるのであるから、宗教家が眞面目に人類に安慰を與へて未來の安養淨土に導びかんと思はゞ、先づ此の現在社會にも樂園を造りて、深遠高尚なる宗教の教義をも聞き得らるゝ餘地をば貧困者に與へてからなければ、とていて佛陀の大慈悲をば普通の人類には浴さる事は出來ないであらふ、

所が近來宗教家諸氏は口を極めて慈善事業を獎勵し、或は着々慈善事業をば起しつゝあるのである、此は吾人の實に賛同す可きではあるが、慈善事業は盛んに行はるゝとしても其の恩澤の及ぶ所は至つて少數である、然かし社會主義は彼の慈善問題のよみな一部少數の幸福をば計かるのではなく、此の不完全なる社會全體をば根本的に改善して、全社會をば悉く幸福に到らしめよみと云ふのであるから、世の慈善問題に意ある者や宗教家は是非共此の根本問題なる社會主義をば講究せければならんであらふ、であるから吾人は

社會

米國に於ける『新十字軍』

問。ドクトル・ヘロン君よ、君はシカゴ市で新宗教を建てたと云ふ事か近來専ら風説するか、ほんとですか。

答。ハー、普通に云ふ意味の新宗教を建てたと云ふのならそれは嘘だ。然し夫か私か宗教としての生活、生活としての宗教を解釋して見やうとして居る事を云ふのならば、そりや實だよ。私は單に人間生活の神聖を示し、生活夫れ自身の宗教として、人間生活を置うと試みて居るのである。

問。君は基督及其傳教者と一致して居るか。

答。然り、私は一致して居ると思ふ。私は信す、私共の思想耶蘇は生活の根本原理及事實を了解した、而して耶蘇か人間生活との問題に就て教へたる原理を應用するは次の精神的革命の職務である。

問。然らば君は耶蘇は生活の解釋者である、正しく生活する事の宗教の開祖だと信するか。

答。然り。

問。そんな方法で、君は、より大なる生活の解釋を人民に知らすか。そんな方法でやるのか。

答。ハー、先づ一般の方法としては社會黨的運動をやつて、次には人類の解脱をやる積りだ。私は信する、社會黨

是非共日本の佛教家が率先して社會主義を取つて、現今の社會のよみな壓迫的不平等なる事から起る、貪婪飽く事を知らざる富者にのみ都合よくして、可憐なる貧困者の爲に益不利

益不幸なる、現今のよみな社會をば根本的に改良して、人類平等に其の衣食住に於て尤も安全幸福なる圓滿社會を組織して、貧富の隔絶をして今日の如く甚たしくないよみに到らしめなければ、到底宗教をして普偏平等に、凡俗にまでも信仰せしめる事も出來なかろふと思ふである。

殊に爰に佛教家諸氏に向つて注意したきは、彼の時期を觀るに敏き基督教家は、早くも此の社會問題に手をつけて着々をして労働者間に立入りて、激烈なる社會主義をば彼等に鼓吹し寧ろ煽動して居るのであるが、尙日本一般の人々の間にも社會主義の妙味をば段々知つて来るよみであるから、此の思想が一般に普及した日こそは、日本の社會改良が基督教徒の手によつて解釋せられるの運命に出遇ふのである、其の時こそは彼基督教が日本社會の根底に固着してしもふて、

私共は社會主義か稱導する經濟的一致の根底は實に耶蘇の精神を顯はして居ると信する。

問。然し過去では社會主義は全く物質主義と同しではなかつたか。

答。然り、ううよ。然し最新の思想、最新の哲學では全く精神と物質との區別を置かない、生活の解釋は二者の一致の上に建てられねばならぬ。人間の經濟的生活と精神的生活とは一であつて、さうしても別ける譯には行かぬ。誰でも身體かなくちや人間の作用も出來ないではないか。

問。過去では、社會運動は構成的政治よりか、現狀破壊の方面に傾くが、君はそんな態度を取るか。

答。ハー、哲學としての社會主義は全く構成的である。構成的運動は其に反對なるものを破壊するの要がある。社會主義は私有財産を排斥する、それは財主的組織は社會主義か正しうせんとする諸有社會上又は道徳上の惡の根元であるからである。勿論總て世界の新運動は古きもの、破壊である。基督教は羅馬帝國の破壊者ではないか、共和は王政の破壊ではあいか、自由は奴隸の破壊ではないか。人民に依て又人民の爲めに共產主義を取る社會主義は、私有財產主義及び其を根底とする總ての組織の破壊者である。

問。運動のやり方はどうするのか。

答。私共は『社會的十字軍』の名の下に一團を造つた。私共は自らで社會黨的使徒と呼ぶ。私共の目的は聞いてさへくるは全國民に自身を捧げるにあるので、教會にても、講義室にても、學說にても、社會運動にても、總て私共の福音をきいてくれる所でさへあればかまいないのである。

問。君は『革命』と云つたが、どんな事のか。

答。私は總ての物の秩序を全く變化する事を意味する、然し必らずしも劇烈にやらねはならぬことはない。私、今度の世界革命は革命中の革命で、精神的勢力の満ちたる善意の革命ならしめた。

問。然らば君は資本的組織に反対するやうに資本家にも十字軍の矛を向けるか。

答。階級組織としての資本家には向けるか、一個人の資本家には向けぬ。他の言葉で云つたら、私共の運動は、「悔ひ改めよ、天の國は近きにあり」との古い使命の新らしき形式である。

問。さらば、天の國は理想に依つて最初に來ねはならぬか。

答。然り、人民の中の生活及社會の再造的理想の存在に依つて。

問。例へば君は現在の經濟的事情を變化する教權を持つて居るならば、夫に依つて充分に人民に幸福を持來す事ができると考へるか。換言すれば、變せられたる外界は神の王にせよ兎徒に無政府黨の一員ならんか、大統領の容態に就きては明ならざるも、重傷なることは疑ひなきが如し。

紛々録

◎日本全國監獄中多數の囚徒を收容し居るは、大阪監獄を以て最も、囚徒の多き實に四千人に下らずと云ふ、炊事の如きは蒸氣器械を以て之をたき出し、レールで運搬する杯中の大仕掛けられた建築物も規模宏大にして夜間電燈の光煌々目を眩せん斗り也。

◎該典獄は頗好人物にして且つ經驗家也、此頃或人に語りて曰く是等の囚徒を遷善改過するは必ず教誨の力を藉らざるべきからず、今にして教誨の効力如何を疑ふものあらば、恰も國民教育の無用を唱ふるにも似たる、洵に幼稚なる考と云はざるべからずと。

◎茲に可笑ことは二三年前に於ける、典獄會議の時内務省より、監獄教誨は有効なりや否や、を詰問案として提出されたる事ありき、此時各典獄間より無難作にはね付られたりとは心地よき次第なれども、教誨の効力如何を疑ふに至ては沙汰の限りやいはん。

◎然れども教誨の効力をして十分に顯著ならしめんには、單に獄中の教誨のみを以て足れりとすべきにあらず、出獄後の

國を造るだらうか。

答。經濟的の變化は直ちに神の國を興しはないが、其か道を準備し、基礎を置く。惡組織は善き果實と善き個性を持ち來す事かできぬ。社會運動に依つて政治上の權力を握つて爲せる經濟上の變化は個人的又は社會的生活の大なる精神的再造の基礎である。若しも私共が正當で、慈愛で、自由である事を人に望むならば、正當で、慈愛で、自由である生活の學校で彼等を訓練せねばならぬ。私共は爭鬭競争中で自由と友愛を彼等に訓練する事はできぬ、奇なる不正義の學校で正義を教ゆる事はできぬ。社會か神の國を見ゆるやうになるまでに、文明は再び生れねはならぬ。

問ふ者はアレナの記者バタルソン氏なり。答うる者は新十字軍の大將デヨヂ、ヘロン氏其人なり。

米國大統領狙撃せらる

米國バッファローにて開設中の博覽會に於て大統領マッキンレーが負傷したると付去る八日前三時半米國政府より東京なる同公使館への公報に「大統領マッキンレー氏バッファローの博覽會に於て無政府黨員に右胸を一ヶ所、胃を一ヶ所銃撃せられ直ちに應急の手當を爲し胸部の銃丸受け抜取りたり、加害者は即時捕縛せり」とあり。

又紐育領事館より外務省へ電報あり、我が高半公使は當日夫人と共に博覽會に赴き居たりといふ。尙其後の報に據れば大統領を狙撃したる刺客は名をノイア

保護完からざるにあるのみ。

◎臺灣富籤の議朝野の間漸く盛ならむとす、國家は之を以て財政の源泉となす、然れども有形の利得のみ計算し、無形の損失を招くを知らざるものあらば、これ着實なる政治家の行爲にあらざる也。

◎布哇に於ける檢疫事件は、我國婦人を侮辱したるの甚しきもの、一時新聞紙上火の手を擧げしが、其後の成行は如何なりしか更に聞く處なし、これも例によりて泣寝入りか、

モルモン宗の渡來たるは既報の如し、今や該宣教師は米國公使の手を経て、内務省に布教の出願手續をなせり、内務省にては目下審議中の由。西本願寺の小田原順則は、不平黨を集合して教友會を組織せり、宗門内是より敵派の転覆起らむ。東本願寺の眞宗大學は工事落成し、此程京都よりの移轉を了へたるを以て、来る十月開校式を舉くる筈、學長は未定なれども多分清澤師ならむ。英皇寵勳に滞留せられつゝある西派新法主は本月々未開地を出發し歸途露國に立寄り十二月中旬を以て歸朝せらるゝ都合なり。寺本婉雅氏の斡旋にて賃受たる、蘭麻經典及び大卓到着せしに付大谷派本山よりは受取の爲め役員を廣島に遣したるが、此程無事受取りを終り經典は直ちに東京淺草別院に送り、自今眞宗大學に於て保管する所と定めし、大卓は本山に持歸りて永く什物として備へ付くる筈なり、該經典は明代萬曆年間の開板にして版本は昨

夏兵燹に罹りて盡く焼失したれば、今や西藏を餘き北豆稚和宮と日本之外には該經典は絶無と云て可なるべし、其形狀は堅三尺横一尺の長方形にして、表裏には極彩色の佛畫を描き、懾然たる金剛を以て頂ひ善美を盡したるものなり。

本會會頭久我侯爵は山形縣有志者の招請に應じ、本多文學士を從へ昨日出發せり、是も同日は福島町有志の請により、一場の演説を試みる所

雜錄

十七編餘香（其七）高陽生

◎阿部慧行師 近代大谷派に於て事務家にして學識あり、學者にして事務の才が有た人は阿部慧行師であらう、師は信州上水内郡桐原村の農家に生れ、隣村の吉田村善教寺で祝髮して久しく此寺の所化僧で居り、また同國下伊奈郡飯田町善勝寺に居られたそな四十前後の年齢に成て京都に出で、善教寺住職の弟として、京都上京區日暮櫻木町の等觀寺へ入寺せられた、遂に學階は擬講となり。職務は一派の執事としてかつ數度隆々として飛鳥鳥羽さんはかりで有た渥美契縁師の上に立て、明治二十年頃同派本山の財政最困難で有た時分に苦心慘憺以て一時の凌ぎを付けた人である、師を克く知る人は常に猪翁と異名を付けて居た。夫は師が慈直朴讷なる德行一偏の人の如き相をして居て、而も中々事務の才あり策劃に長じて居て、俗に言ふ中々喰へぬ老翁で有たからの事である、

◎師の言行近日言行錄として出版する企てがあるソーナが、

け、兩本願寺の學校の如きも、創設以來年所を経ると同時に宗學も大に進歩した、隨面學派の争が紛起して、東西共に大騒動を遣た、即ち西本願寺には三業の惑亂あり。東本願寺には口稱の異解ありとて、世に九升三合と並べ稱したといふ。扱其當時兩本願寺に在て大立者と成て働いたは東に在ては香月院深勵講師で西に在ては淨信院道隱師である、深勵師は越前國金津町永臨寺の人で名は垂天龜州と號した、同時の圓乘院宣明講師と兩々相下らず、大谷派に於て宗學の基礎を据ゑた人である、道隱師は明教院僧鎔の弟子で眞實院大瀛と共に三業異解の智洞を追ひ際けた人で、初めは河内國古市西念寺に居られたが、後に豊前國福島村長久寺に住せられた、名は諱忍薩州と號した、曾て此二師が糺之杜の苦肆に會合せられた、深勵師先づ問ふには、貴派三業異解の過根已に蔓延せる様子なるが其處分法は如何にサモ心配ソーに問はるゝと、道隱師は答へて彼徒の如きは弊派自ら處分の道あり、貴山口稱の異執曰今如何の状ぞと、是に於て深勵師慨然として先師隨慧臨終の際子を召して、老齋終世此異執を排せんことに力を注ぎしも志を果さりし故、汝予が遺志を紹ぎ必此徒を刈除せよと、故に予は遺囑を全うせんとは力むとて閑談數刻に亘り、爾來二師最親密をきはめた、京都を經て伏見に至り、川船に搭じて泉州祐真寺に赴かれた、其徒は師が變わらんことを恐れて、勘三郎なる者が師の船を

一つ二つ聞た事を紹介セヨー、師はまだ一難僧にて善教寺に

居た時分、外出する時は心す本通を通行せずして、徑路ばかりを歩行せられたソーナ、夫は人目を避け雜踏を嫌て、懷中より書物を出して見たのである、師は嘉永四年能登頼成師の異

安心騒動の時、時の講師や勵講達と共に江戸に艦送せられた、當時長汀曲浦の間を過ぐる五十三驛到る處に一詩を吟せられた、江戸に於て一時入牢して鐵窓の下に苦まれしも、冤解けて出獄後會て當時の苦を語られ無つたといふ、師が執事たる當時は手紙政略を言ふべく、暇ある毎には必ず書翰を認められる、其文は簡単で唯安否を問ふに留り何人にも通ずるのである、地方の信徒にして本山に參詣して師に面會する者あらば、必ず其人の郷里の有名の信徒へ其書翰を托す、斯くのこととして地方信徒等の意をつなげて居られたといふ。

◎伊豫の得成師 師は大谷派では性相學者の譽れ高く、且漢籍には其造詣餘程深かつたといふこと、多分勵講に成た人々と思ふ、性最瀟洒も邊幅を修めず、或る年高野山の招に應じて、山に於て經を講ずることと成た、本山思ふに師は例の垢染みた風體をして行くであらうが、他山へ行くこと故、少し氣を付けるが宜ろしいとて、新調の白衣を下賜した、依て師は其白衣を着して講席に出でたるに、頭髪が黒く延びて居たから、聽講者中聲を發する者が有て曰く、髪愈黒くして衣愈白しと、師聲に應して曰く、人愈多くして顔燃えんと欲すと、以て漢學の造詣の深い一端が分る。

◎深勵と道隱兩師 享和の頃は有徳公の中興と共に文運益開

見守りつゝ陸行した、すると一士人がありて勘三郎と前後して、同じく隕上を歩して師の船に目を注ぎて居る、勘三郎は定めて刺客ならんと思ひ愈守護を怠ら無つた、船八軒家の達人と彼士人の踪迹を失つた、隱師寺に着せらるゝと勘三郎は眞に土人の事を語ると満座打驚いて居ると、其時人がありて刺を通じた。見れば先の勘三郎の語る士人である、士人は一封の書を懷中より出して師に示す、師一讀して厚く士人を勞し、且歸りて和上に謝せよと厚く陳謝して、遣り返す、士人も一揖して去りたれば、衆其故を問ひたるに、あれは隣山の深勵師が予が萬一の事がありはせぬかと氣遣て、彼士人を遣して予を擁護して呉れられたのである、好意謝すべしに餘るとして喜ばれた、

南信の風物（承前）高陽生

諫訪より飯山まで十九里餘の里程あり、一帯に下り道とは隨處終の際子を召して、老齋終世此異執を排せんことに力を注ぎしも志を果さりし故、汝予が遺志を紹ぎ必此徒を刈除せよと、故に予は遺囑を全うせんとは力むとて閑談數刻に亘り、爾來二師最親密をきはめた、京都を經て伏見に至り、川船に搭じて泉州祐真寺に赴かれた、其徒は師が變わらんことを恐れて、勘三郎なる者が師の船を

同師に氣の毒したり、夫より葛氏は余等の辭するにも拘らず、

恭謙ある人(下)

曉鳥敏

世の中の頭の高い、恭謙ならざる人の有様を見るに、多くは、自分のまことの價値を知らぬやうである。人間か人間の價値を、はじめに考へて見たならば、即ち私共か、他人の價値を定むると同じやうな心を以て、はじめに自分の價値を考へて見たならば、決して、決して、自分がむらい者であるとは思はれない。然るに、世の中の人の多くが大抵、自己を處するに寛にして、他人を遇するに酷であるからして、恭謙なる事がむづかしいのである。故に私が考うるに、人がはじめて自己省察をやつたならば、茲に始めて、恭謙の徳か備はあるであろうと思ふ。

私は人間の懶慢心は個人の平和を害し、社會の安寧を害する根本であると思ふ。つまり總ての不道徳的行爲はこの心より起ると思ふ。之に反して、恭謙なる心は總ての道徳の根本であつて、人がこの心に住したならば自分も平和であるし、社會も安寧であると自己信する。而して、この恭謙の心を起す基となるのは自己省察にあると思ふ。うここでこの自己省察と云ふ事が、なかなか容易な事ではない。從ひて、恭謙なる心を得るのは、亦むづかしい。

人が世の中にたつて事業をする事のできるのは、つまり世の中を深く知つてからねばならぬ。その世の中を知ると云ふには、先づ始めに、その社會を知る、その知る自分はいかなるものであるかと云ふ事を考へる、之が解釋を得なければならぬ。この自分を知つて始めて、世を知るを得るのである。故に昔から大事業をやつた人は皆、自分の價値を知り、世の價値を明らかに見ゆる。だから、昔から大事業をやつた人は、大なる恭謙なる人であるらしい。釋尊やキリストや親鸞聖人や法然聖人は云はすとするも、ナボレランの如き、秀吉の如き、ワシントンの如き、家康の如き、グラッドストンの如き、彼のビスマルクの如きすら決して高慢な人はなかつた。彼のクロムエルの如きは「あんな思ひ立つた、事業をやつた人だが、自ら、「自分はまづまらぬ事はない」と云ふて居る。この心があつて始めて、彼のやうな大事業が出来たのである。

それで、世の中にたつて、世の中のためにもなり、大きな事業でもやろうと思ふ人は是非にこの恭謙の心を得る事に勉めねはならぬ。つまり恭謙な人は安穏な人で、歡喜の人であるのみならず、世の中にたつて大事業を爲すに足る人である。世の中にひかへめかちになつて居る人が事業か出來ぬやうに思ふて居る人もあるが、これは大なるまちがいである。恭謙であつて、懶慢でない人であつて、始めて、世に庭し安く、世に對して大事業を起す事を得るのである。故に私共は勉めて、この恭謙の心を養成せねばならぬ。この恭謙な

心を養ふために、まことの自分の價値を知ることに勉めねはならぬ。

私は、人間か恭謙の心を養ふためには、自己省察に大に勉めねはならぬ。さればその自己省察はどうしてできるかと云ふに、自分の顔の墨は自分か見えぬではないか。私共か、自分の働きでまことに自分の價値を知らうと思ふのは、中々困難なことである。

總て高いの低いの大いの小さいのと云ふことは相對的のものであるからして、同じ高さのものでも、比べ處によつて高いとも云はれ低いとも云はるゝ、同じ大きさのものでも、その比べものによりて、大きいとも小さいとも云はるゝ。富士山を筑波山と比べれば高いと云はるゝが、ヒマラヤ山と比べると高いと云ふ事ができぬ。若しも富士山か、筑波山か愛宕山か比叡山ばかりを見て居たならば、自分は一番高いと思ふであらうが、新高山やヒーラヤ山ばかりを見て居たならば、自分は尤も低いものであると考へなければならぬ。之と同しく私共か世に處して、自分かむらいものであると思ふて懶慢に流るゝと、自分はつまらないものであると思ふて謙遜にするとは、私共か自分を比較する、その比較に取るものも如何によるのである。若しも私共が人の短所のみを見て自己の長所と比べるやうな事かあらは、自分がむらいと思ふて、懶慢所のみを見て、自分の短所と比べて見たならば、必らずや、人はむらいもの、自己はつまらぬものと云ふ心に住し、こゝ

に始めて恭謙に身を持つ事ができるのである。人の長所を見て、自分の短所と比べる、これが恭謙に身を處する一法である。

次に又、希望の低い人は懶慢に流れ易いが、希望の大きさ、現想の高い人は、眼のつけ所か高いからして、中々自分がむらいものだなどとは思はないで、自分は及はないもの、足らないもの、つまらないものだと思ひて、自ら恭謙にならざるを得ないやうになる。故に自己の理想を高くし、希望を大きくするのは恭謙の基であると云ふてよい。この身を以て高山に對する時は自己の低きを覺えすれば居られぬ。この小なる身を以て、かの蒼海に對すれば、小はますく、小と感せするには居られぬ。故に私共は、常に思ふ處を高尚にし向ふ處を大きにしたならば自然と自己の足らぬところを悟り、自己の小なるを感じて、自ら恭謙の徳が得らるゝであらう。即ち、理想と希望とを高大にすると云ふことは恭謙の徳を養ふ、第二の方法である。

要するに、恭謙なる人は、人の長所を見る人である、高大な理想を有する人である。この人は人の長所を見るが故に人と交はりて平和を保つ人である。この人は高大な理想を有するか故に、世に對して大なる事業を爲し得る人である。換言すれば、恭謙なる人は私人として完全な人であると同時に、公人としても申分のない人である。

とかく青年は心が頭に登りて懶慢に流れ易いものであるから、私共青年は勉めて人の長所を見、脚みて理想を高めねは

ならぬ。かくて、從順に、恭謙に人と交はり、世に處するに心を用ひねばなりませぬ。

そこで、人の長處を認むると云ふには、十方一切にみちみちてある處の宇宙の大精神、盡十方無得光如來を信するか一番手近い道である。而して理想を高大にすると云ふにも、この如來と等しき信に到らんと志し、この如來の境界を常に觀するやうにするが、尤も容易な方法である。即ち恭謙な心を養ふ尤もよい方法は、如來を信することである。常に如來の鏡に向へは、自己の汚れも知れるのであるから、茲に始めて、恭謙の徳が得らるゝのである。故に私共は、世の中に恭謙なると欲する前に、如來のみ心に從順にならぬはならぬ。如來に従ふは恭謙の徳の源泉であります。

讀者之天地

時 教 面

拜呈貴社倍々御繁榮の段舞之至に不甚依然て記者聞下宗教の信仰は憲法の明文に依ても其自由なるは吾迄もなし左りながら基督教が且博愛を唱道するに、
はらず社會に害毒を流せる類例は決して他宗の上に之を見聞せざる義に有之候通
正義公道なりとして宣教師より傳道師に至る迄唱道しつゝあるにもかくはらず言
行相反し且其野卑なるも亦之れを他宗教の上に決して見聞せざる處に御座候左に
一二の事柄を例舉して以て社會公衆に質さんとす

詩院之於中國的觀察

(須らく坊守を啓蒙せよ)

土倉是空

宗教の成立は一に唯だ、信仰の如何に紀因すべきものにして、信仰なくむば教は究も自己の生命を断たれたるかの如く、其の當初の目的を圓滿たらしむを欲するも、亦た得へからざれはなり、而して信仰とは一念歡喜、敢て名狀すべくもありじ、乃ち勃然として我が心靈中に湧起する、一種の發動的念力にして、あらゆる内容の懷疑を駆逐し、すべて外界に對する妄執を掃蕩して、明暗々々、圓満々々、見ざるも見るべき事々確認し、至らざるもの至るべき身なりと己を深信し、朝な夕な、時々亦刻々、忘れきらむと欲するも忘るゝ能はざる、靈知的作用にして、強て云はしめは我にこれ彼れと冥合し、乃ち佛心凡心と一致して離るべくもあらず、所謂抽象的現象を云ひ詮はしたる名詞なりとす、故に宗教の隆盛は決して宇宙の高層、信頼或は僧徒の豊多なるを意味し且つ語るべきであらずして一人にても佛祖の教條に歸順して、而して身心の歸着を期し、我が信仰の向ふ所には百難千難を排し萬難を嘗め、まよよ一身を犠牲に供すと云ふも、敢て怖るゝの法心なきんが以て、最も宗教の盛観なりと云ふべし、宗教家たるもの誰か此所に若想せずして可ならむや。

政 時 報

乃ち末代今のかぎりの才氣に満ちて、能く暗唱等を爲し得る。但し暗唱等を爲し難い、眞俗の間に布き給ふぞ、これ實に絶世の英斷、偉大の抱負、常人の能く企及し能はざる所爲なりと云ふべし。

今眞宗寺院に於ける内部を窺ふに體亦體、性亦性、吾人に痛哭一番せざらむと欲するも、得べからざるを如何んせむ、就中、家庭の紊亂せる九尺二間の家庭に及ばざる事實さへなしとせず、而して家庭の紊亂を來すや、主因種々雜然たりと云へども、要は其の主管者たる坊守自身が牢固たる一定の信仰心なく、所謂身を以

あらされとも如何なる巧妙策略を以て此目的を遂げたるかな想像し得らるべく又布留川支署長が典獄の命令か如何一人の吉川傳道師をして監獄内を巡見せられたるは監獄の不規律にして並に法規より國民を無視せられたるものなりこれと同時に基督教に籠絡せられ如何に心醉せるかな想像するに足るべし而て吉川傳道師の余をして云々は現に教説たる牧野氏の職務を闇に横奪せんの思料ありと云はざるべからず兎も角以上の行為を以て我々國民たるもの輕々に看過するを得ざるなり

現時吉川傳道師と監獄支署員の關係

布留川監獄支署員先立て吉川等の演説を聴聞し且訪問するより基督教信者にて監獄雇醫なる牧野氏も吉川と共に演説を爲し依て署員の半以上は其氣を損せざらんと欲して附從せり布留川支署長吉川傳道師を案内して監獄等署内悉く巡見せしめたる當時より不平の氣ある一部長二三署員は未だ聽聞訪問せず之れ即ち署員の不和合と獄務平ならざる發動機にして何日か破裂すへきは論を俟たるなり

一現に教説師の有るにかくはらず一日四回囚徒に基督教の説教をしたる一看守あり

一吉川傳道師と日々往来する程なれば署内に於ても日々何度ぞなく基督教の話をなし長きは殆んど數時間に亘り故に服務時間を欠き終に署長其他署員と快からず人民亦間々署内の談論等を聞きり

吉川傳道師へ機會を與へし事

監獄内を吉川傳道師へ巡見せしむる上諸氏を誘導せしより監獄員の信者は兎に角裁判官其他官吏人民の迷惑一と方ならず既に吉川傳道師、裁判官等を訪問する時は甘言以て接し去ては「キリスト」さへ信仰すれば裁判官もいらず裁判所もいらぬ敗物なりと以て彼等に言行一致なく飽送も國家に害毒を流すべきものならん

一明治廿四年八月十日本更津町貞淵海岸に吉川傳道師並に同行者八、九名遊泳其歸路井水(飲料水)中に沐浴及び禪を洗濯せり小生外數名目撃せり

右責任を以て投書仕候條亂文秀筆御取捨の上御掲載成下され度御照會に依て御答も可仕候

上總國君津郡木更津町貞淵三九二

明治廿四年八月十七日

鳥 海 慶 次 邦

あらされども如何なる巧妙略を以て此目的を遂げたるかを想像し得らるべく又布留川支署長が典獄の命令か如何一人の吉川傳道師をして監獄内を巡回せしめたるは監獄の不規律にして並に法規より國民を無視せられたるものなり之れと同時に基督教に籠絡せられ如何にて心醉せるかを想像するに足るべし而て吉川傳道師の余をして云々は現に教誨師たる牧野氏の職務を閑に横暮せんの思料ありと言はざるべからず兎々角以上の行爲を以て我々國民たるもの輕々に看過するを得ざるなり

現時吉川傳道師と監獄支署員の關係

一布留川監獄支署長先立て吉川等の演説を聽聞し且訪問するより基督教信者にて監獄雇醫なる牧野氏も吉川と共に演説々教を爲し依て署員の半以上は其氣を損せざらんと欲して附從せり布留川支署長吉川傳道師を案内して監房等署内悉く巡見せしめたる當時より不平の氣ある一部長二三署員は未だ聽聞訪問せず之れ即ち署員の不和合と獄務平らなさる發動機にして何日か破裂すへきは論を俟たるなり

一現に教誨師の有るにがくはらず一日四回囚徒に基督教の説教をしたる一看守あらし長きは殆んど數時間に亘り故に服務時間を欠き経て署長其他署員と快からず人民亦間々署内の談論等を聞けり

監獄内を吉川傳道師へ巡見せしる其上諸氏を説導せしより監獄員の信者は兎に角裁判官其他官吏人民の迷惑一ミ方ならず既に吉川傳道師が裁判官等を訪問する時は甘言以て接し去てはキリストさへ信仰すれば裁判官もいらず裁判所もいらぬ廢敗物なりと以ても彼等に言行一致なく飽送も國家に害毒を流すへきものならん

一明治廿四年八月十日本更津町良瀬海岸に吉川傳道師並に同行者八九名游泳其歸路井水(飲料水)中に沐浴及び禪を洗濯せり小生外數名目撃せり

右責任を以て投書仕候條亂文禪筆御取捨の上御掲載成下され度御照會に依て御答

上總國君津郡木更津町貞淵三九二
明治廿四年八月十七日
鳥 海 橋 次 郎

100

て能く人を化すてふ根本的基盤に缺損する所あると、一は教育なきの結果、諸事不注意にして、乃ち修身齊家の志に乏しきが爲め、竟に斯の亂調に及ぶもの多しとす、總て一家の整理は多く婦人に由るものにして、苟しくも婦女たるもの一念此所に傾注する所なからむか、家政はものづから紊亂せざるを得さればなり、而して子女を育成するは主に婦人の天職なれば、子女の剛鈍、賢愚は一に婦人の双肩かゝるといふも過言であらざるべし殊に寺院に在る坊守たるものは家庭の教育に留意するは謂ふ迄もなく、一面住職の補佐役たるを忘るべからず、故に居常種信徒より接するや、徒らに世辞的愛嬌に馳走するよりも、寧ろ塵界の慰撫に勞くし、乃ら皮相の世知辨を翻弄して譯もなし檀信徒の歓心を買はむより、飾りなき切音、能く信佛耐徳、大義を稔知せしめさるべからず、ア、坊守の責任世间幾多の婦女よりも一層重大なりと云ふべし、況んや宗黨の規律を遵守し、宗祖の芳躅を襲踏するの覺悟あらは、須らく信仰の一途に憑りて直進せざるべからず、然るに斯の用意、斯の覺悟なく、以て坊守の任務を遂さむとする、宛も百年河清を俟つに等しからむか。

今日の寺院に在る坊守の多くが、信仰と教育の乏しきは社會一般の定論にして、今更吾人の喋々を費するの餘勇なしみ云へとも、一言茲に費す決して無用の漫言ごとする勿れ、一毫不治の症なりとして見捨てたりて何ぞ無意味に之に落胆するを得むや、醫師能く始め患者又れ愈りなほは、早晚快復の彼岸に達すべし、今日の無能者は明日も無能若いふべからず、能く之を導き能く之に教へ、以て其の啓蒙に盡すあらむか、結果の奏効敢て疑ふべくもあらずこそ、於是乎知る、今日の寺院に於ける家庭を教説し、坊守教育の普及企畫し、信仰の根^二を扶殖せむこならば、必ず先づ一定の機関を設備して、之に由りて其の教説、普及、扶植を談合する傍ら、經典師釋或は普通の教育者に基き、信切叮嚀に教示するの所あらば、勞簡にして益する所方さに鮮少ならずと信す、所期果して肯當を得は宗門の慶事、國家の幸福、豈それ偉大ならずさせむや、知らす教家思ひを茲に致すか否や。

投稿歓迎

本部廣告

(一〇二)

今回、會頭久我侯爵、總務委員本多文學士左の日割を以て山形地方巡回相成候條此段廣告候也

山形縣
赤沖高米
内湯松烟澤町
形市面町村町
二十九日日
二十一日
(此後未定)

九月 大日本佛教徒同盟會本部

（此後未定）

信仰の餘瀝 再版刻成

文學士 清澤滿之師序
文學士 近角常觀君著

●定價金拾五錢 ●特別減價拾貳錢但郵稅不要 ●郵券
代用割増

本書は著者が、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其説く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして憂然胸中秘奥の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ、苟も信仰の飢を叫ぶの士は、必ず一讀せられんとをす、む、苟

發行所

大日本佛教徒同盟會出版部

新刊

（一〇二）

眞俗二諦辨 全冊

文學博士 村上專精師述

本書は村上文學博士が眞俗二諦の義に付き、極めて平易に、極めて通俗に、極めて明瞭に述べられましたもので、眞俗二諦と云へば誰れしもよく承知し居る事なれども、佛教の本旨を尋ねれば、眞俗二諦の説より外はありません、眞俗二諦と云ふもの、實は八萬四千の法門皆之に包まれて居る事申しても宜し、去は各宗各派の教法は悉く眞諦俗諦の二門を開いて弘通したるに過ぎないものであります。

先づ本書ははじめに眞俗二諦の語を應用するに至りし濫觴を述べまして、眞俗二諦に對する一般の概念を與へ、次に聖道門諸宗に亘り、次に真宗一家に限る眞俗二諦を辯すること、縷々として盡きざるの感あります、其間諸經を引用して證となし、例を擧げて説明を容易ならしむる等用意周到、少しあれ憾なきものは本書であります、宗教家は勿論佛教信者たる者は、必ず本書を一讀せられんとを望みます、

東京市本郷區森川町一番地

大日本佛教徒同盟會出版部

新佛敎

定價一部郵稅共
七錢五厘
一年分郵稅共八
十五錢

第一編第十號（九月一日發行）

田中治六

無懷

ボルテール

宇宙一妙子

牛庭

境野黃洋

杉村縱橫

牛庭

宇宙一妙子

- 我が汎神觀
- ▲非「泣き」
- 「加藤博士に答ふ」を讀む
- ▲「無花果」を讀む
- 貧富の懸隔
- ▲高野觀
- 求信居士よ答ふ
- ▲粗漏々々便
- 僧侶の妻帶

右發行所

（東京駒込

片町十六

佛教清徒同志會

(一二)

政 教 時 報

精神界

毎月一回（十五日）
發行〇一部十二錢
一年一聞二十錢

九月五十日 第九號

- 行 論 説
- 善惡の分界に就て 露藤 唯信
- 責任煩惱 ○收賄書を誇る書 ○
- 社會を忘れたる宗教家 ○如來常に社會を憶ひ給ふ
- 一心制意 講話 浩々洞註
- 汎神論と解脱 楠 龍造
- 心機の展開 上杉文秀
- 怒の話 多田 邽
- 法螺の説 喻 烏 敏
- 車夫問答 青兎 堂
- 秋風拂長窓 清澤滿之
- 白露金風 佐々木月樵
- 三山めぐりの記 常盤櫻丘
- 北遊雜纂 多田 邽
- 雜纂
- 粗漏々々便
- 僧侶の妻帶

一町東京市本郷區森川
番地二百四十
號 浩々洞發行

社會報道

武田篤初師題字 石川中將印著

南軒 富井隆信師述

白骨章說教

定價金二拾六錢 郵稅金六錢

白骨の御文章は中興大師衆生化益の熱誠より老少不定の境界、草露風葉の人命なる事を詳述し玉ひ拜讀者をして戰栗として後生の一大事を警覺せしむる深趣巧妙の御文なることは世人の逼く之れを知る所なり。該書は本章の造由出據を詳述し章句字を正解し引用の格言、詩歌、譬喻、因縁等の内外諸書を抄録して斬新なるものを選び無常談は勿論安心報謝のこと々當時に適切なるものたるを失はざるべし。

徳易明快に尤りに資にするの料りに於ては、自己の信念たるものならず現實俗誦儀忠君愛國の公布教傳道の好材料たるなり。

眞宗俗誦の教義

實價金拾錢 郵稅金三錢

島地黙雷師題辭 南軒富井隆信著
人たるもの一生の間は人世の義務として、其職務を怠るべからざるは勿論なり。特に眞宗は眞俗一誦即ち安心と報謝の二門を用本務を勉勵せざるべからず、其法方として、其の道を盡して公私百般の業書は師が眞宗俗誦の活動を以て教義するの教旨なれば、近來の好著詭者ノ利益、少なからざるを信す。

佛教修身人の道

定價金貳拾六錢 郵稅金四錢

(通俗佛教評)本書は専ら囚人を啓發せん事を期したる教誨叢書の第一編として公にせられたるものにして通俗平易に左の事を説明したるもの而も其の言ふ所、今日に適切なるもの多く撰ひしを以て國民一般の讀みものとするものなどに喩好のものたるを失はざるべし。

無常、相續、處世の標準、世界の進化と人の本分、義務と餘裕富の慾望と良心、良心と苦樂、人生の目的、直宗の義務等の如きを以て、是迄、佛教にて凡て女子に対するものなりと云ふべきである。

佛教婦女修身の心得

定價金貳拾五錢 郵稅金四錢

(中央公論評)近時歐風學問の發達につれて女子の位置大に昂進したると同時に故福澤翁の新女大學等出で女權の伸張を鼓吹するもの益々多くなりたるが著者は是迄、佛教にて凡て女子は男子にまさりて罪ふかくあさましきものなりとなしむるに對し、世或は時代思想と佛教とは枘鑿相容れるものなりと憂ひ男女の本分職分權限の異同を親切に説示せられたるものなり。

再版豫告 村上博士講演集
右は初版は已に賣盡したる故、更に訂正増補の上文明堂より再版すること、なれり
大賣捌所 本郷四丁 目五番地 京都油小路 興教書院堂

大日本佛教徒同盟會出版部

○發行所